地上の春

人人の性格がなぜかうも荒くなるのか
人人はなぜああも冷淡に歩み行くのだらう
つもる塵さへ春らしく煙る街上に
荒い素のままな
嚴つくいたましいゆがみを見せた容貌が
いくつも私のあとから
あとからと來る

刺されたやうな目付に優しさは見えない
その額はあをざめてゐる。
私はいま見る
割れたやうな感情の曇りを見せた人人の
どうにもならない荒い悲しみに
つかれて歩む日日の姿を見る。

あれらの人人にも
やさしい生活がとりまいてゐたのだらう。
しかし今は背後からも前からも
人間とともに荒くなつた自然を見るにつけ

かれらはああいふ荒さを容貌に加へた
ギチギチに迫られて凝固した。

人人よ
もうすこし静かに優しく
心に濕ひをもつて
この春の地上にふさはしく歩から
あのギチギチな
いかつい表情のなかにも
いまはあたたかい感情をあらはしたまへ。

午後

友はその愛する妻と
子供とをつれて
僕の家をたづねて來た
友の妻は美しかつた。

友は
高高と子どもを胸に抱いてゐた
まるで勝利つたもののやうに
自分らはみな椅子にもたれて話した。
おたがひがよく生きなければならないこと
その一つ一つに深い呼吸をかんじた。

都會

詩集「寂しき都會」抄出

龜

何時のことだか覺へないが
私はあるお寺の池で
珍らしさうに日南ぼつこをしてゐる龜を
うつとりと眺めこんでゐた。
風のない穩やかな日であつた
溫かい自然木で作つた棚にもたれて
だんだん乾いてゆく龜のせなかを見詰めてゐた。

龜のせなかは古い石垣のやうに
すこし青みがかつた飴色を帶び、
あたたかい日かげのなかに柔らかさうに
持つたらくずれさうに見えた。

龜はあたまも足もなかつた
みな甲羅のなかにこんもりと潜んで
誰も知らない世界に閉ぢこもつてゐるらしかつた。
そのまま
何處へでも投げ出されてもかまはないやうに
ころころになつて

動かうとしなかつた。
龜は何んだか考へ込んで居さうに思はれた
そのあたりの空氣の色まで
變色してゐるやうで恐ろしい氣がした。

それは絶對に音といふものがしない日で
お寺のそとも内もしづまり返つてゐた
私はすこし眠いやうな氣さへし出した。
私は柵のそとから
こつそりと手を出して

龜のせなかをそろそろとなで廻した
龜のせなかはつるつるしてゐて
皺の寄つたところが
糸を張つたやうに指さきにふれた。
そのとき私もどきりとした
龜はびつくりしたらしかつた
空氣はもとのままな平明ないろに變つたやうな氣がした。

私はそれから永い間
やはり柵にもたれて龜を見つめてゐたのだ
どれ位經つてゐたかわからないが

龜はそつと首を出した
そのくらい目を上げて
まじまじと私を見たとき
龜が私の考へてゐることをすつかり先刻から考へあてた
やうに
微笑したやうにおもはれた。

私も龜がさつきから考へてゐたことがわかるやうな氣が
し出した
どこか靈的につながつてゐる哀れな生きもの同土の
とても僞ることのできない言葉が感じられた。

ほんとに靜かな日であつた
龜は間もなく首をすつこめた
日は措しげもなく暖かく注いでゐる
さうしてそこらに櫻の花が一杯に固まつて
咲いてゐたやうに覺えてゐる。

街裏

私はいまでも
一人きりになりさびしい街裏をたづねてゆく
そこで靜かにさけをのむ
誰とも行つたことのない
誰にも知らない濕々した小路の奥で

ひとり座つたなりで
野に置かれたやうに長い時間をおくる。
私は炭のやうな暗いかげを
壁の上に曳いてゐる。
どす黒く滲んだやうに
彫りもののやうに動かないで
人氣のない荒い空氣を冷たく吸つてゐる。

つづめて言へば私のむかしの時間に
炭をつかんだやうな過去にあへるのだ。
一人ゐたさに
雨の日はぬかるみにかげを落して
ぬかるみを拾ひ歩きして
うすぐらく
路次の奥をたづねてゆくのだ。
そこで私はがりがりと何か食べてゐる
無理に子供の口におしこむやうな食べものが私に強ひら
れる

いろいろな人間の心が其處に座つてゐる時みな浮きあがつてくる
私はそれを考へる。

そこの寒さはざらざらして襲ふ
ささくれ立つた床や柱が煤ばんでゐる。
女がいつまでも坐つてゐる
心臓の弱いらしい
蒼白い紙卷のやうにやせた手足をもつた女どもだ
私はそれらをもしげしげと眺める。

哀憐と憎みとを交ぜた感情で
その藁のやうに乾いた心を眺めてゐる。

青い蝶

詩集「田舍の花」抄出

山上の火

山の上で火が燃えてゐる
空とすれすれなところに
誰かが焚火をしてゐる。
水の上は靜まつてしんとしてゐる
星がぱちぱち流れてゐる
山の上の焚火がぱちぱち撥(はじ)いてゐる。

暗夜

晩方がおとづれて來て
あちこちで雨戸を閉め出す
さびしくあちこちにその音がつづく。
そとでは誰もしらない間に霜が下り
隙間もなく暗さが含み出される。

外から來るものは物憂い雨戸をうつ
暗い　しめつた風だけである。
そとに何ものが居るかわからない
暗い家と家とがちぢこまつてゐる。
何が起つてゐるか知れない
ただ恐ろしい氣がするだけである。

遠い笛

虹が立つた城のなかで
ゆるい笛の音がつづいて
嬰兒はぽつかりと目をさました。
白いさびしい光があつた。
だが笛の音色はしなかつた。

どこに母親の顏があるのか
かたかげの障子ばかりが白く見えた。
よく見ると　すぐ顏のちかくに
紛ふ方もない母親が
その靜かな瞳で眺めてゐた。
それゆゑ嬰兒は一時に悲しくなり
こゑを上げて泣き出した。

城壁

蟬が一どきに啼き出した
聲をそろへて戰ひ出すやうに
大きな城壁のやうな林の奥から……。

みんな鎧を着てゐる
弓矢をつがへてゐる

林と林とがつながり合つてゐる
そとをゆく汽車の音さへしない。
ただ一さいに勝鬨をあげてゐる。

そして一枚の葉もうごかないのである。
しづかに土さへ熱く。

歸り花

詩集「忘春詩集」抄出

童心

稚なきころより
われは美しき庭をつくらんと
わが家の門べに小石や小草を植えつつ
永き日の暮れゆくことを知らざりき。

いま人となり
なほこの心のこり
庭に出でてかたちよき石を動かす。
寒竹のそよぎに心を覗かす
われは疲れることを知らず。

かかる寂しきひそかごとを爲しつつ
手をあらひまた机に向ひぬ。
このこころなにとて妻子の知るべき
まして誰にか語らんとするものぞ。

わが家の庭にさまざまの小草さかりて
みな花を着けざるはなかりしが
いまは花咲くものを好まず
わが好むは匂ひなく
色のつめたき常磐樹のみ。

つれづれに

その一

日ざしいつか暖かくなり
わが門のべにうららかなる。
門のべに立ちいでて

白き道路をながめ
空しく人かげを見おくる。
人かげ垣根にまがり
ちぢまり顫えゐる。
いびつになりて見ゆ。

その二

ゆかしき家ならびて
門のべも清く掃かれある。
門のべにみな櫻つぼめる。
垣のうちに子守唄やさしく

小路の日だまりに支那人のかがみて
陶器に金燒を入れ
碎片(かけら)をつげるある。
みな靜まりて心をこむる姿なり。

桃の木

小學校のまはりには桃咲きけり。
怜しき子ら出で來りつ
桃下あかきに染まり
みな笛のごとくうたへり。
何時の日、わが子の
この桃の木のもとを歩まん。

ちひさき靴をはき
何時この土の上に下り立たんものぞ。
埃のうち美しき織りもののごとく
子らは午後過ぎをかへりゆく。
みな桃の木を仰ぎたれど
手折らんとするものもなし
みな修身の心をおさめ。

ふいるむ

わが家はきのふもけふも
子守唄には暮れつつ
洋燈の下にみな集りて
おころりころりをうたへり。

人の世の佗しさおのれ父たることの
その眞實を信じる寂しさ。
ふいるむのうつり變りゆく
その羽毛のごとき足なみの早さに
おのれひとり
いくたびか停まらんとしつつ
その陰影をさへとらへんすべもなし

忘春

いつの日に忘れしものならん
納戸の小暗きあたりを掃きたりしに
三株ばかりの球根の種
隅よりころがり出でて

もはや象牙のごとき芽を吹きけり。
芽にちからあり
指觸れば水氣ふくみゐて光る、
餘りにしほらしく
土にうづめぬ。

おもかげ

よその兒をながめむとて
何しにこころ慰め得べきものぞ。

よその子はよその子にして
わがおもかげをつたふべきにあらず
されば何しに羨むものぞ

かく思へどもよその兒のよく肥り
可愛げなるを見れば
疊を搔くごとくくやしきこころちす。
みまかりあとかたもなきわが子の
いまはいづこにあらむかと思へば
とり返しのつかぬことをせし、
泣きもえぬことをせしものかな。

ちちはは

わが子を愛づるとき
老いたる母をおもひいでて
その心に手をふれしこちするなり、
誰か人の世の父たることを否むものぞ
げに　かれら　われらのごとく
そだちがたきものを育てしごとく
われもこの弱き子をそだてん。

五月幟

蒼き魚のかたちせる
五月幟(さつきのぼり)も樹てつつ
わが子をことほぎ
かくなせしもみな過ぎたることとなりつつ。
いまはその鯉幟をつつみ
目にみえぬところに匿せり。
かるはづみにながめてならぬ——。

靴下

毛絲にて編める靴下をもはかせ
好めるおもちやをも入れ
あみがさ、わらじのたぐひをおさめ
石をもてひつぎを打ち
かくて野に出でゆかしめぬ

おのれ父たるゆゑに
野邊の送りをなすべきものにあらずと
われひとり留まり
庭などをながめあるほどに
耐えがたくなり
煙草を嚙みしめて泣きけり。

我が家の花

そとより歸りきたれば
ちひさきおもちやの包みかかへ
いそいそとして我が家の門をくぐりしが
いまそのちひさき我が子みまかり
われを迎えいづるものなし。

母おやはつねにしづかにしづかにと言ひ
あかごの目のさめんことをおそれぬ。
さればわれはその癖(くせ)づきし足もとをしづめ
そとより格子をあくればとて
もはや眠らん子どもとてなし、
かくしてわが家の花散りゆけり。

筆硯に

われ筆をとることを憂しとなす
こころなく何をつづらんとする。
夜ふかく洋燈を點火し
母のすがたをおそれ書きものをしつ

倦むことなかりしわれなるに
いまは筆とることのもの懶く、
たとへよしあしをつづるとも
何とてかかる深き溜息をするものぞ。
花ぐもり憂き日に
われひとり筆とり哀しむ。

夜半

みな花をもて飾りしひつぎをばとりまき
あめふる夜半をすごしぬ。
人の世のちひさき魂をなぐさめんと
けぶる長き青い草のやうなるせん香を

たえまなくささげたりけり。
その座にわれもありまづしき父おやとして
そだちがたきものをそだてんと
日夜のつかれさびしき我もつらなりぬ。

最勝院自性童子

朝日のうつれる、
みどりのかげさせる障子のうちに、
ねむりふかく居しなれ。
庭よりその部屋をさしのぞくに
白き肌せる時計のみ音しづかにかかり

なに人もとどまりあらず。
きのふ乳母ぐるま買はんとおもひ
よこはまにも行かば形やさしきを得んと
立ちあがりしわれなるに
なに人もなき部屋にさす朝日のみあかるく
ひとつの影だにもなき。

象

古き染附の皿には
かげ青い象ひとつ童子に曳(ひ)かれ歩めり。
この皿古きがゆえ
底ゆがみ象のかげ藍ばみ
皿のそとにも寂しきかげを曳きけり。

かかる古き染附の皿には
うるしのごとく寂しく凝(た)ま固りたる香(そこ)臺見え
日ぐれごろ
象のかげ長からず
ちぢまり一人悲しげに見ゆ。

駱駝

うすき日かげに
駱駝つながれ居る。
老いたる人のごとく
もぐもぐと終日もの食みてゐる。

天幕は雪空のごとく
灰ばみ悲しげに吊られ
駱駝もの言はず
ひねもす口を動かして居る。

道草

わが妻とともに語らひ
町へ出でゆかざること幾年になるべき。
わが妻をあはれと思はざることなけれど、
もはやわが妻をたづさへ行かんに

あまりに眩ゆきここちぞする。
稀に立ちいづることあれど
垣根のくらきに添ひ行くのみ。
妻は家をまもるもの
まことに立ちならび出づることなくなりぬ。

秋日

秋日かげうすく
ゆるるは竹のかげのみ。
しめれる土の上に佗せきかげの
時うつりゆくごとに

空へ震えて過ぎる。
かかる心われにもやどり
かげはかげを重ぬる。
かくて秋日を忘じたるごとく
端然とわが座りてゐる。

歸り花を見る

むらさきの枝に白い斑點がある。
よくみると陶器に描いてあるやうな
支那風な何かの白い花である。

花の蕋はのんびりとしてゐなくて
ちぢれてうすい黄みを雜ぜてゐる。
匂ひはあるかないか

近づいても襲ぎあてられない。
白高麗から削り取つたやうにも見える。

幽遠な小春日のしごとで
なにか思ひ出してふいに咲いてみたが
寒くてようは開かれずに
餘りたのしいことがないやうに
そのためちぢれて悲しげに見える。
ぽつぽつのある枝に
うてなも短かく花が歸り咲きをしてゐる。

永い間枝に着いてゐて
花は散ることを忘れてゐるまに
くされてしまつてゐた。

垣にそひて

まだ青い垣根にそうて
うら町の静かな路がつづいてゐる。
どの家にもささやかながら庭があり
庭には雨あとの水がたまつてゐる
清い水の上に木の影がある。

さういふ景色のなかに
動かない秋がこもつてゐるのか
わたしの歩みも静まる心もちがする。

さういふ景色のなかで
わたしはふと耳をかたむけた。
聞えないくらゐひつそりと
誰かが爪を剪つてゐるらしい音がしてゐる。

さういふ景色のなかで
貝のやうな爪を切る寂しい音がつづく。
爪は心に重みのあるとき
悒悒したときによく伸びるといふ
その爪を女が椽側でひつそり切つてゐるのだ。

浴泉抄

詩集「高麗の花」抄出

浴泉

一人ゐて幾週(いくめぐ)りの日か過ごしけむ
日ごとに溫かさ加はりて
こころすこしあかるくなりゆく。
その明るさを日にいくたび
我が手にすくひ

嬉しげに眺めては暮らしつ
されど寂しとはゆめ思はず
かく妻には告げなむ――。

うつけものの歌

朝の間は鯉の泳げるを見て
時の移るを知らず
ふところ手をなしつつ
障子にからだをもたらせ眺む。

苔生えし石に背すりよせ
何のこころぞ
いくたびか細鱗を光らす。
われは用なきうつけものの
けふ爲すべき文もなければ
世に珍らしきものを眺むるごとく
鯉の泳ぐ姿を見る。

むかし興義の爲せるこころも
このやうなる魚の上にやあらん。
興義も悲しと見しならん。
わが庭の池みづ日ごと蒼みて
鯉ふとり浮き沈み悲しくす。

新衣(にひごろも)

新しき衣身にまとふとて
なにのうれしきことのあるものか。
よし嬉しかるとも
そはつかの間に消えゆくものを

かく知れどなほ新しき衣をまとひ
わがはかなげなる
佗しげなる
さていづこにゆき誰人(たれ)にか逢はん
かく思ふときふたたび衣ぬぎすて
もはや顧みることなかりき
たんすに藏(しま)ひおくべく言ひ遣り
ふたたび見んとはせず——。

石一つ

石を眺め悲しいといふものやあらんや。
姿をかしく
されど皺深く蒼みて
雨にぬれるとき悲しといふものあらんや。
わが性はつねに
ひらたく美しからぬ庭石をながめ

そをわが家にはこび
日ねもすは眺めあかぬなり。
竹の葉すこしく植え
そのかたへに語ることなき生きものの
石一つ坐りゐるよ。——

われはうつけものの
年わかく世を厭ふといはば人人の嗤はん。
されどいつはりにはあらず。
まことは俗流のひとなるがゆゑに
佇みて石をばながむ。

こころあらば
誰かわが家に來りて
水カ、と打ちそそぎたまへ。
語ることなき石あをみて
しだいにおのが好む心をば得ん。

淺い春

みやこには霜まだきびしきに
早やも溫泉どころに
春のけはひさまよひ充ちぬ。
われのごとく心けがれしものの
行ひわるきもの

けふ病ひを得て
いと淺き春にめぐりあふとも
何のよろこびあらんものぞ——。
喜ばんとするは世過ぎたるものの爲すこと、
わがごとく若くして老いたる心もちたるものは
なにごとも坐して思ひ深むこと、
人に告げんこととてはなし。

まことに餘處人のきたりて
君はも何しに生き給ふぞと問はば

わかいのちしぜんに盡きるまで
ただ坐りてあらんと答へんのみ。

喜び樂しみのたぐひ今は全くかげなく
いたづらに温泉にこの身ひたすとも
汚れし俗人のこころ
何とて洗ひ清めんことを得べき——。

俗人の歌

われは日ごとに詩文を賣り
詩文のこころそこなへども
かへり見るいとまとてはなし。
まことはうた人にあらずして
市に商ふひとびとに異ることを知らず。

われもの書けば惡鬼らむらがりて
なれこそまことを書くべしとは思はず
なれこそ恥を綴りて世のそとに行くべしと云ふ。
まことにわれは俗人のこころを持ち
今樣文人の道をけがすのみ。
いついかなる日とても
この花園の埒を越えゆかん——。
ひとたびは花園の徑を喜びしかど
わがこころ世の好みにもるるか
世はさとく我がおろかなる性もてるか——

われはひたすらに俗人の道こひしく
世の常人のすぎこしにならふことの
朝夕に
身にしみてぞ覺ゆ。

黄ろい蠟石

冬日の窓さきで
わたしは黄ろい蠟石にわが名を彫りながら
寂しい石印の粉を吹いてゐる。
こまかく動く心を印面にひと鑿づつ當てゐる間に
壺の赤い豆菊まで粉にまみれて
わたしは寂しくはない。
なんでわたしの心は佗しいものぞ。

冬咲く花はみな象牙のやうに眞白く
そして美しい脣を覗く齒のやうに冷たいことを知つて
ゐる
それゆゑわたしは美しいひとの齒に
その名前を彫るむかしの人のやうに
冬日の窓さきで
老眼鏡をかけながら彫つてゐるのだ。
日だまりの枯草原に心をねむらせてゐるやうに
あつたかい嬉しい氣もちでゐるのに
なんでわたしは寂しいものか——。

灯を剪る

今夜、火桶を抱いて
ぽつねんと靜坐してゐると
まことに天地は悠々として私には恙はない。
火のはじく音と白い灰が寂然としてゐる。
妻も友だちもかかはりのない界に
地球のどこか最極端に寄せられてゐるやうな氣がする

あたかもわたしだけがひとりで灯を點じて
何千年後にさびしく居殘つて
その灯を繼いだり剪つたりしてゐるほど
一切の幽遠が充ちてゐる。

若し暗い戸外へ一歩わたしが踏み出たら失望するであらう。

其處に層を爲す甍や燈影を眺めたら
一層わたしの考は絶望的なものに感じられるであらう。

しかしわたしは戸外へは出ない、
わたしのゐるところは依然として
何千年後の幽寂をも共通させてゐるのだ。
それゆゑ私は聲を上げて誰人を呼ばうとはせず
自ら脣を開くといふことすらない。
そして私の前に暗然として何千年が行手に聳えてゐるだけである。

夕餉のしたくはまだできぬか

夕餉のしたくはまだできぬか
さぶしい汽笛があちこちで鳴つてゐるのに。
障子の紙が藍ばんで
うすい羽根のやうにふるへ
それを眺めてゐるとしだいに眼がちらつくほど

子供ごころになりやすい
樹の幹のぬれたうそ寒い
寂しい冬の日暮であるに。

冬の日ぐれは
つめたい陶器の底にでも蹋んでゐるやうに
どこを向いても白つぽく悲しい
それだのに
夕餉のしたくはまだできぬか

たどたどしげな幽遠な冬の日に沈んで
お前たちのしごとも捗取らぬのか。
早うそのあたたかい夕餉のしたくを急いで呉れ。

支那風な景色

支那人は西日のかげの射すところに
窓をつけ竹や芭蕉を植ゑる
そしてその影を愛で眺める
祖先からの心を永く受け繼いでゐるのだ。
わたしの國では
床の間に蘭や梅花の鉢を置き

にがい鶯いろの茶をすする
女の指さきになる生花の花を味ふ。

支那人はぼんやりといつも悲しげで
小鳥の瞳のいろに時計を讀み
翡翠の玉をかざして日の光をながめ
己れの生涯のうらないをする。
わたしの國では
海や山の上の夕燒けや指紋のうづまきに

自分のさいはひを讀まうとする。
この二つのさびしい國が海を隔てて
お互ひの心を知らうとしてゐる。

冬日を呼ぶ

竹のかげがななめに庭さきから
疊の上にまで這うてくる
そのことごとくは冬日の匂ひで
あるかないかの花の香もする。
わたしは蟲のやうに白い手をかざね
蟲に添うて

背中を干してゐる。
だが　かぎりある日かげは移つてゆく
もと來た疊のうへから
ひえびえと消えてゆくのだ。
ふいるむのしぼりのやうに縮まり
そしてあとかたもない。

菊を彫る人

うすぐらい床の間に
石刷りの古い百壽圖がかかつてゐる。
翁が一人、童子が一人、
そして角のある鹿を從へてゐる。
地には寂しい一本の木茸が生え
翁は鹿と何か話してゐるらしい。
その繪のまはりには白字の石刷がある。

その古い床の間の前で
朝になると
庭をへだてた障子硝子の明りで
ぐいぐい菊の花を彫つてゐる人がある。
花は白い。
一瓣ごとに鮮かに雪のやうに彫られる。
葉はみどりに――、
朝のあかりのある間に
菊は鋭い白さを砥いでゆく。

寒竹

寒竹のやさしい芽が茜いろに伸び
そのさきの方に二枚の新しい葉がある。
小春日のあさい日に透いて
それはたぐひなく美しい。

冬の寒さの中に伸びた寒竹、
さういふわたしは古い古い日本のならはしを
いつの間にか心にやどしてゐる。
庭を掃くをんなよ
その芽を折らしてはならない。

寒竹

寒竹の葉がこまかい、
石の手洗ひにかげが映つてゐる。
チャチャ……と枝をうごかしてゐるのは
挽茶色をした尾の迅い小鳥で
苔をしめらせるのは夕濕りである。

そよかぜもない、
垣のわづかなところを潜り、
早隣りの南天の寂しい幹を搖がしてゐるのだ。
すこし暗みかけた挽茶色の
呼えてするどいチャチャの啼聲だ。

高麗の花

白い高麗の香合が一つと
その他には何も置いてない、
いまは立春に近く
長閑な光は障子のそとに流れてゐる。

その障子の外に
金網の長い鳥籠がかかり
閑寂な小鳥が止り木を敲いてゐる。

古への高麗人は寂しい、
灰色めいた光澤をみせた香合ををりをりは作り
自ら心を遠きに遣つて眺めてゐたらしい。
まるで蛤のやうにのどかに生き
春の空氣に緊つた形を動かしてゐる。

そこに名も知れない一人の高麗人が
いつも蹲んで眺めてゐるやうにも思はれる。
この高麗は梅花一點の内に沈んで
わたり一寸くらゐであるのに
机の上いつぱいに形をひろげてゐる、
古い高麗人の威嚴は丁々と胸を打つてくるのだ。

わが心もかくあれと

晴れた日にわたしは形の悲しい
吃々(きつ〳〵)としてゐる一つの石を見つけた。
古い庭のある家の
竹の植つたところに。

わたしはそれを家にはこばせ
その石のおもてに水をたたへるため
圓い石手洗の穴を穿らせた。

それに水がひたひたと暮れ迫つたら
わたしはどんなに永く佇つてゐることか、
それを眺め同じい悲しげな氣もちになることか。

石屋は毎日まるい穴をほつて行つた
底ひろがりに、

そして例の悲しげな覗きを前にした石は
もう水をたたへて玄關の
青い寒竹の蔭に濡れてゐる。
わたしはひとり其處へしやがんで眺めてゐる。

洋燈

みんなこの洋燈（らんぷ）の下へあつまつてくれ。
そして今夜は快く何か食べてゐてくれ。

わたしはちよつと賑やかな通りへ行つて
すぐに戻つてくるほどに。
みんな暗い家のなかを明るくし
穏かな話をしてゐてくれ。

家族

家族といふものは
縁の木かげで食事をしたり
楽しい話をしたりするものだらうか。
美しい妻を招んで
白い乳母ぐるまの幌を帆のやうに立てて

田舍の徑をうたひながら行くのは
あれは樂しい家族でなくて何であらう。
だがあれは音樂ではなかつたか、
音樂に聞きとれた空想ではなかつたか。

故鄕圖繪集

山の上

毎日川原を眺めてゐる
白い寂しい姿をした石のむらがりは
北方の山へむかつてあたまを埋めてゐる。
いつまでも動かないでゐるのに

石は石をはらんでゐるのではないか？
流は荒い刺々した寒さで
山の上の暗い曇りに壓せられてゐる。
わたしは肩をすぼめて歩いた
みんなの威嚴がわたしに迫るからだ

家庭

家庭をまもれ
悲しいが營んでゆけ
それなりで凝固つてゆがんだら
ゆがんだなりの美しい實にならう。
家庭をまもれ

百年の後もみんな同じく諦め切れないことだらけだ
悲しんでゐながらまもれ
家庭を脱けるな
ひからびた家庭にも返り花の時があらう
どうぞこれだけはまもれ
この苦しみを守つてしまつたら。
笑ひごとだらけにならう。

氷を愛する歌

詩集「鵠」抄出

切なき思ひぞ知る

我は張り詰めたる氷を愛す。
斯る切なき思ひを愛す。
我はその虹のごとく輝けるを見たり。
斯る花にあらざる花を愛す。

我は氷の奥にあるものに同感す。
その劍のごときものの中にある熱情を感ず。
我はつねに狹小なる人生に住めり。
その人生の荒凉の中に呻吟せり。
さればこそ張り詰めたる氷を愛す。
斯る切なき思ひを愛す。

何者ぞ

何者か割れたり。
我が中にありて閉ぢられしもの割れたり。
かれらみな聲を擧げて叫び出せり。
桃の實のごときもの割られたり。
星のごときもの光り出せり。

ⓒ 埃の中

或日通りを眺めてゐたりしに
一列の樂隊の過ぎ行けり。
そのあとに群れたる子供ら尾き行き
我が子の姿も打交りたり。

かくて彼女は埃の中を行き
自ら時の過ぐるを知らず
その虹の燃ゆるがごとき
逞しき埃の中に成人す。

彼女

我は彼女を蹶飛ばせり。
曾て彼女の前にうづくまりし我は
眉を上げて彼女を蹶飛ばせり。
彼女は蹶飛ばされながら微笑ひ

追ひ詰められ
山の上のごときものの上に坐せり。
彼女はなほ自らを護りて坐して笑へり
我はなほ彼女を蹶飛ばさんため
その山に攀ぢ登らんとす。
我は足を上げて遂に山を蹶飛ばせり。

彼と我

我は何者かと我が有てるものを交換せり。
その者は長き髪を垂れ
暗夜とともに沒し行けり。
常に星のごとく明滅す。

我は彼より手渡されしものを擁き
雨戸の外の暗夜をうかがふ
雨戸のそとに大なる者立てり。
我は彼とともに或物を交換す。
死のごとく苦しきものを交換す。

情熱の射殘

自分は結果に於て恐ろしいことになるので
仕方なく引金を曳いて
自分の中にある熱情を射殺した。
彼は何者かに擁かれたまま

鳶のやうに寂しく屋根の上から轉がり落ちた。
そして熱情と別れた自分は
冷たい巖窟のやうなところに
硝煙をあびたまま喪失者のやうに佇んでゐる——

人家の岸邊

己は思ふ。
冬の山々から走つて出る迅い流れが
海を指して休む間もなく
我々の住む人家の岸邊を洗つて過ぎるのを思ふ。
人家の岸邊に沿うて瓦やブリキや紙屑が絶えず流れて
ゆく。

海はかれらを遙か遠くに搬ぶであらう、
波は知らぬ異境に瓦やブリキを打ちあげて行くだらう、
そこにも人は住んで岸べにむらがり、
瓦やブリキを拾ひ上げ打眺めるであらう、
我々の現世と生活は解かれ記されるであらう、
その波はまた我々の人家に捲き返し烟れる波を上げ
遙かに戻り來るものの新鮮さで
我々を呼びさますであらう、
我々は答へるであらう、
そして彼等の言葉であるところのものを
朝日の耀く岸邊に佇み讀むだらう。

59
14

友情的なる

此の日雪降れり。
此の日我心鬱せり。
此の日我出で行かんとはせり。
何者かに逢はん望を持てり。
何者かに、——

何者かの留めがたき友情を感ず。
友情的なる漂渺を感ず。
此の日雪ふれり。
友情的なるものを痛感せり。
雪の中に我出で行かんとはせり。

我は

我は清く生きんことを願へり。
我は美しき恵あらんことを乞へり。
我はまた富と名とを祈れり。
我は、——

我は今は毀れたる机に對へり。
我が背骨は地球のごとく曲れり。
我が肋骨は幾本かを不足す。
我が頭はブリキを埋積せり。

己の中に見ゆ

我はくろがねの扉の前に佇めり。
我はひねもす其扉を嚙ぢれり。
或は爪をもつて引掻き穴をあけんとせり。
くろがねの扉に血のごときもの垂れたり
その響は聾するごとし、
我は飽くことなくその扉を叩けり。

動かざるものを動かさむとはせり、
扉の奥に何物のあらむや、
何物を得んとするや、
我は恐らく生涯これを叩かんとす。
叩き破らんとす。
身をもつて耐へんとはせり。

砂塵の中

われは愛する庭を破壞せり。
自らその古色蒼然に倦怠を感ず。
されば此の日
ひそかなる微風の中に

石を起し樹木を倒伐せり。
何ぞ我が情の悲しみあらんや、
石を起し苔を剝奪せるに、
おのづから西方に風起り、
我が庭に濛々たる砂塵を上げて行けり。

子供が大人になる頃の日曜日を――――。
母について考へた。そして遠い將来を想つた。
之の楽しみを捨てたらしい此の頃、父親はそうもなうめ其の原
も苦かな空想して居る。然し何きかもが駄目になり、子供は日曜日
子供は親に期待して居る。何処かに遊びに行きたいと日曜の二日
、そわしい日々が車輪の如く過ぎて日々やすく日曜日だ

遠い日曜日

595
140

室生犀星詩集

昭和四年十一月二十二日
昭和四年十一月二十五日　初版千七百部

定價二圓五十錢

著作者　室生犀星

刊行者　長谷川巳之吉

刊行所　東京市麹町區一番町五
第一書房
振替東京六四二二三
電話九段三三四四

印刷者　萩原芳雄
製本者　橋本久吉

595
146

堀口大學著　堀口大學詩集……新菊判總革特製本　定價六圓

堀口大學譯　月下の一群……新四六判總革　定價三圓五十錢

堀口大學譯　アポリネエル詩抄……四六判英國角紙　定價二圓五十錢

堀口大學譯　コクトオ詩抄……菊判和紙刷　定價二圓八十錢

堀口大學譯　グウルモン詩抄……菊判和紙刷　定價二圓八十錢

堀口大學譯　ジヤム詩抄……菊判和紙刷　定價二圓八十錢

堀口大學譯　ヴエルレエヌ詩抄……特製賣切　普及版　定價一圓

堀口大學著　歌集　男ごころ……新三ヵ判拝錫四枚　定價一圓五十錢

萩原朔太郎著　萩原朔太郎詩集……新菊判總革特製本　定價六圓

西條八十著　西條八十詩集……新菊判總革特製本　定價六圓

茅野蕭々譯　リルケ詩抄……新菊判四百頁　定價三圓八十錢

三富朽葉遺著　三富朽葉詩集……四六判八百頁　定價四圓五十錢

佐藤春夫著　佐藤春夫詩集……四六判二百頁　普及版　定價一圓

上田敏遺著　上田敏詩集……四六判七百五十頁　定價三圓八十錢

三木露風著　三木露風詩集……四六判七百頁　定價三圓八十錢

室生犀星著　室生犀星詩集……新刊

木下杢太郎著　木下杢太郎詩集……近刊

田中冬二著　青い夜道……近刊

故片上伸著　露西亞文學研究……菊判六百二十頁　定價三圓十錢

山内封介譯　露西亞革命の豫言者（メレジコーフスキイ文藝論集）……菊判三百五十頁　定價二圓五十錢

山内封介譯　改造か革命か（メレジコーフスキイ文藝論集）……近刊

矢野峰人著　近代英文學史　改訂版……菊判六百六十頁　定價三圓八十錢

萩原朔太郎著　虛妄の正義……新刊

萩原朔太郎著　詩の原理……四六判三百五十頁　普及版　定價一圓

三木露風著　露風詩話……四六判二百頁　定價一圓五十錢

矢野峰人著　詩學雜考……四六判二百頁　定價一圓五十錢

595
146

595
146

野口米次郎譯　ゴンクウルの歌麿……四六倍判百七十頁以色刷六枚一色刷挿繪六十數枚　定價五圓

野口米次郎著　歌麿北齋廣重論……菊判白卅頁挿繪卅二枚　定價二圓

野口米次郎著　春信清長寫樂論……菊判白卅頁挿繪卅二枚　定價二圓

野口米次郎著　人生詩集……四六判五百頁　定價二圓五十錢

野口米次郎著　抒情詩集……四六判特製　一二三四各冊　定價一圓八十錢

野口米次郎譯　浮世繪譯詩集……近刊

野口米次郎譯　ブラウニング詩集……近刊

野口米次郎譯　ポオ詩集……近刊

野口米次郎譯　ブレーク詩集……近刊

野口米次郎譯　ロゼッチ詩集……近刊

山名格藏譯著　日本の浮世繪師……近刊

595
146

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black